

「家族」再起誓い合う

ここにいるよ

沖縄 子どもの貧困

⑨

第1部 群像

マユ(下)

マユが中3になった春、きょうだいは上の2人と下の2人で別々の児童養護施設に入った。虐待された時代と比べ、温かい食事と安心して眠れるベッドは「天国」だった。学校の制服も支給された。当初は自室に引きこもっていたが、職員や似た境遇の同級生たちに励まされ、徐々に登校できるようになった。

「大好きだったから余計に許せなかった」。更生したという母の言葉を信じられなかった。「誰が家族をバラバラにしたの?」何で私を産んだの?。怒りの感情が渦巻いた。高校に進むころには気持ちがすさみ、リストカットや皮膚をかみちぎるなどの自傷行為を繰り返した。

母のことは許せなかった。自分を虐待した男と母は子どもを家から追い出した後、窃盗の罪で逮捕された。ニュースにもなったと聞き、憎しみが深まった。施設入所直後、償いを終えた母が面会に来たが、マユはうつむいて目を合わせなかった。「何をいまさら」。謝罪され、手紙

きょうだい4人お母さん許そう

を渡されてもそっぽを向いた。「大好きだったから余計に許せなかった」。更生したという母の言葉を信じられなかった。「誰が家族をバラバラにしたの?」何で私を産んだの?。怒りの感情が渦巻いた。高校に進むころには気持ちがすさみ、リストカットや皮膚をかみちぎるなどの自傷行為を繰り返した。

つらい生活の中、好きな本や漫画を読み、イラストを描くことに熱中した。虐待された小学生のころ、漫画の世界に入り込むことだけが救いだった。「漫画家か、イラストレーターになりたい」。幼いころ思い描いた夢が、ずっと心の支えだった。

だが専門学校に進学するため資金はなかった。夏休みのアルバイトでたまったのは入学金にも満たない金額。諦めかけたとき、児童養護施設などの出身学生を経済的に支援する「進のはしファンド」を知った。「進学できると知り、希望が湧いた。昨春の入学時から月4万円を受給し、学費に充てている。



今も手元にある母からの手紙。謝罪と娘を思う心情がこぼれている(画像の一部を加工しています)

おとし、別の施設にいた弟と妹が転入し、1年間だけきょうだい4人が同じ施設で過ごせた。最初はきこちなかったが、慣れるとけんかもできるようになった。菓子の奪い合いなど、ありふれたきょうだいげんかがうれしかった。幸せだった幼いころの記憶がよみがえった。「できるなら、もう一度『家族』をやり直したい、って思った」

マユが卒園する直前、4人で部屋に集まって誓った。「みんなでお母さんのこと、許そう。笑って会いに行ける大人になろうね」。身を寄せ合って泣いた。面会に来た日を最後に、母は消息不明になった。マユは冷たい態度を取ったことを悔やんでいる。「やり直したい」と謝罪し、「また交換日記をしたい」と言った母を拒んだ。「お母さんに会いたい」。施設を出てからは一層思いが強まり、元気になるかどづかが気になる。

「アメリカのアニメ制作スタジオで働きたい」と夢を語るマユ。経済的に自立し、母を探したい。その一心でデザインの勉強に励んでいる。(文中仮名)

「子どもの貧困」取材班・田嶋正雄 || 火々木曜日連載

記事に関するご意見、情報をお寄せください。

ファクス：098(860)3483 メール：kodomo-hinkon@okinawatimes.co.jp